



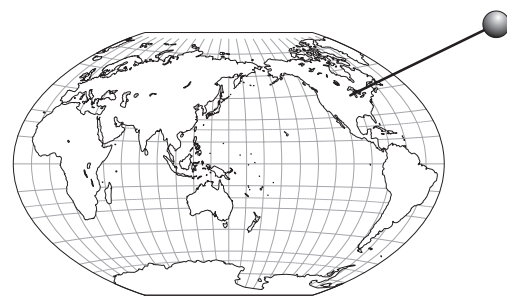
アメリカ留学を通じてーウィスコンシン大学マディソン校

西田 有輝*

私は2013年夏の2か月間、豊田工業大学大学院「修士海外実習」プログラムを利用し、アメリカのウィスコンシン大学マディソン校にてインターンシップを行った。このプログラムの目的は、海外の大学において研修を行うことによる課題解決能力・実験技術の習得は勿論であるが、異文化を知ることにより豊かな人間性を養うことで、将来的には国際的に通用する技術者・研究者を育成することである。

ウィスコンシン州はアメリカ合衆国の中西部の最北に位置する州である。日本人にはなかなか馴染みの薄い州ではあるが、その豊かな土壌を生かすことで農業が非常に発達しており、米国内では「酪農の国」の愛称で親しまれている。一方で寒暖の差が激しいことでも有名で、夏は非常に過ごしやすい日が多いが冬は寒さが厳しく、日によっては-40度以下となることもある。人口最大の都市はミルウォーキー市で、バイクメーカー「ハーレー・ダビッドソン」の生まれの地として有名である。ミラービールを筆頭としたビール産業、さらにはスポーツも盛んであり、近年では日本人メジャーリーガー青木宣親がフランチャイズチーム、ミルウォーキー・ブルワーズに所属したことも注目された。

私はそのウィスコンシン州の中南部に位置するマディソン市の大学にてインターンシップを行った。マディソン市は同州の州都であり、学術都市として有名である。人口は23万人程度で、ミルウォーキーに次ぐ州第二の規模を誇る。美術館・博物館など豊かな学術施設をもつ一方で、カレッジスポーツも盛んにおこなわれており、全体が活気に満ち溢れた学生街である。ウィスコンシン大学マディソン校はTimes Higher Education誌の2013年大学評価で世界30位（東京大学23位、京都大学52位）にランクされるなど全米屈指の研究機関として高く評価されており、卒業生にはノーベル賞受賞者11名を擁する。社会科学分野、再生医療分野において強みを持ち、特に再生医療分野ではヒトES細胞を世界で初めて単離するなど最前線の技術力を誇る。



私が今回留学させて頂いたのは Lih-Sheng Turng 教授率いる再生医療応用のためのバイオマテリアルを主に扱う研究チームである。そこで私はかねてから研究材料として扱っていた試料の生体適合性を調べる事を目的とし、他にも最先端の技術やノウハウを学ぶことも目指した。

滞在していた学生寮から大学までは毎朝15分程度かけて徒歩で通った。私の住んでいたダウントウンは学生街の真ん中に位置し、その施設のほとんどが大学関連のものであった。世界最先端と評されるだけあり、大学内の設備・装置は非常に充実しており、校内を見学するだけでも楽しく、勉強になるほどであった（写真1）。実習中は日々実験を行う傍ら、週に1回ずつ行われるグループ及び個人ミーティングに参加し、そこでプレゼンテーションやディスカッションを行った。また滞在中は大学寮の一室を間借



写真1 所属していた研究ビルの内部の様相

* Nishida, Yuki
豊田工業大学 大学院修士1年
名古屋市天白区久方2-12-1 (〒468-8511)
sd13431@toyota-ti.ac.jp
2014.2.13 受理



写真2 アメリカンフットボールの試合の様子

りし、現地の学生との共同生活の中で交流を深めた。カレッジスポーツが盛んなこともあり、野球・アメリカンフットボール・アイスホッケー・バスケットボールのための専用のスタジアムが各地に設けられており、シーズン中にはチームカラーのユニフォームを着たサポーターで街中が埋め尽くされる。私が留学した際はちょうどアメリカンフットボールのシーズンで、チケットを取るのに四苦八苦しながらも経験した現地のスタジアムの熱狂的でスケールの大きい雰囲気は、とても日本では味わえないものであり、非常に心に残るものになった(写真2)。また休日は長距離バスを利用し、シカゴ・ミルウォーキーを中心とした周辺都市まで足を伸ばし、観光はもちろんのこと、現地に在住していた友人に会うことや、趣味であるスポーツ観戦を行うことでリフレッシュを図った。

私自身今回が初めての海外長期滞在ということもあり、当初は思い通りに行かず、辛い経験をすることも多くあった。渡米前には宿泊先、ビザの手配、研究に関するディスカッションなどを現地の方々とメールによるやりとりにて行ったが、言語に関する不安や、自身の現地に関する知識不足などが重なり、スムーズに進まない場面が多々あった。先方の方々はもとより、所属する研究室の岡本先生を始めとしたメンバーの助けを借りることで、なんとか留学までこぎつけることが出来た。

渡米後も当然ながら困難の連続であった。私は元々英語力に不安を抱えていたこともあり、コミュニケーションの面で苦労することが非常に多かった。プレゼンテーションやディスカッションの場面では伝えたいニュアンスをうまく表現することが出来ず、もどかしい日々が続いた。また日本とは大きく異なる文化・環境面でも同様に苦労した。

渡米した当初は中西部特有の、乾燥していて寒暖差の激しい気候に悩まされ、しばしば体調を崩すことがあった。また食事の面でも、大味でスパシーな味付けが舌に合わないこともあり、手元に調理器具がほとんどない中自炊を強いられるシーンがあった。さらには寮の住人の中には夜遅くまで音楽をかけて騒いだり、奇声をあげたりするような学生が存在し、こうした事が原因であやうくトラブルになりかけるという問題も発生した。

私がこうした困難を実際に経験することで学んだことは、人間が異なった環境に適応し、そこでコミュニケーションをとるのに最も重要な要素は、「豊かな人間性」であるということだ。確かに英語を含む現地の言葉を堪能に話せることは重要であり、意思疎通の幅を広げるという意味での大きな武器になる。しかし私はコミュニケーションをとる上で、本当に重要なのは積極性と、伝えようとする意志の強さであると考えている。私は留学当初、細かい文法やアクセントを気にするあまり、間違いを恐れ、積極的にコミュニケーションをとれないで居た。しかし何度も挑戦し、苦労しながらも表情やボディランゲージを駆使することで、最終的には意思疎通をとることができ、更には困難があった分相手との距離を縮めることが出来た。この経験は、コミュニケーションには「相手のことを理解したい」、「相手に自分のことを理解してほしい」という強い意志をもって積極的に行動することが重要であるということというのを肌で感じたものになった。文化や環境の面でも同様のことがいえる。気候や食事、風土というものは、当然土地により異なる。相手を自分に合わせるのではなく、相手の事を理解し、広い心と視野を持って、相手に合わせ順応していくことが真に求められる姿勢であると考えている。私自身も元々は神経質な部分があり、環境の変化に対してストレスを感じるということが少なくなかった。しかし今回の経験で、様々な変化を楽しみながら受け入れていくことで、良い意味での無神経さや図太さといったものを身につけられたと自負している。「郷に入っては郷に従え」ではないが、こうしたバイタリティを身につけられたことが今回の留学の最大の収穫だったと考えている。

私にとって人生最大の挑戦とも言えた海外留学は、想像とは異なり華やかな事ばかりではなかったが、得られたその全ての経験が自分にとってかけがえのないものになった。この経験を活かし、国際的に活躍できるような研究者・技術者となることが、サポートして下さった方々への最大の恩返しになると考えている。末筆ながら豊田工業大学岡本正巳先生を始め、日ごろからお世話になっている方々すべてに感謝を申し上げ、締め括りとする。